真の学びとは - 公害の原点に立ち返って -

『宇井純セレクション[１]　原点としての水俣病』2014 年 7 月 31 日初版　著者=宇井純

編者=藤林　奉，宮内泰介，友澤悠季　新泉社

鈴木敦也

日本の公害の原型である「水俣病」。その発生から 50 年以上たった現在に生きる私たちは、何を問い、どう生きていくべきなのだろう。水俣病が公式に認定されるまで、被害者やその遺族と関係者、それに対する加害企業や政府との想像を絶する闘いがあった。そして、その長い闘いは今でもなお続いている。本書にあるのは、加害者としての自責の念と被害者や遺族の想いと真っ向から向き合い、水俣病の解決へ向けひたすらに行動し問い続けた宇井純さんの闘いの軌跡だ。三部から構成される本書の中で、水俣病に関わり続けた宇井さんが主張するのは、公害において人々が持ってしまう幻想に対する問いだ。公害が起これば、被害者と加害者の経済的・社会的力の差、一方的な抑圧が生まれる。その抑圧を目の当たりにしても第三者による公平な判断が成り立つという幻想。水俣病の原因究明の過程であったのは、社会的強者である企業や政府はたまた学者による事実の否認、隠蔽であった。

第Ⅰ部では、水俣における事件を通して語られるいくつもの問いがある。水俣病とは何なのか。なぜ事件は解決していないのか。水俣病という公害問題に見られるのは、この近代日本社会の抑圧的な構造の縮図だ。小さな声は掻き消し、事実は揉み消し、訴訟になればある程度の補償金を。見舞金協定では、工場排水が原因でない場合見舞金の交付を打ち切ること、原因であった場合も新たな補償金を要求しないことが企業によって盛り込まれた。また、水俣病で苦しむ人々が勇気を出して声を上げても、都市部の官僚や加害側に「補償金欲しさのニセ患者」とレッテルを張られた。水俣病は社会的な場面では、企業側からの視点でしか語られていなかったのだ。第Ⅱ部では宇井さんが開いた自主講座「公害言論」について纏められている。大学の在り方という問いがここにはある。東大工学部助手であった宇井さんが自主講座を開いたのは、最高学府としての東大が足尾問題以外の公害においては加害者側についたからであった。権力のある学識者は真実が分かっていても、企業側の反論に加担したのだ。第Ⅲ部「生きるための学問」では学問は本来、何のためにあるのかという問いについて考えさせられた。そこである問いは、学問とは裕福で特権的階級である、立身出世を目的とする人たちのためのものなのか。虐げられ、希望を失ってしまった社会的弱者に光をあて、道筋を照らしてあげるためのものではないのだろうか、という問いだ。

「公害について公平な判断が出来るなどと幻想を抱いてはいなかったか。この問いに黙り込む私に被害者は呼びかける。よその人に苦しみを知ってもらって、同じ苦しみを繰り返さぬようにするには、あんたの力も貸してほしい。早い話が外人ひとりに納得させるにも、英語で説明してくれる人がおらんと実に不便だ。日本中ふれて歩くにも、あちこちに顔の広い人がおったほうが便利には違いない。まあこれからも一緒にやってくれないか。本当に明るい声でそう頼まれれば、身の程知らずにもう一度やってみようかな、などと思ってしまうのである。」現地主義を貫いた宇井さんは、水俣にも多く足を運び、直接被害者と出会い、話を聞き情報を集めた。そんな宇井さんのから問いは水俣病を原点として、企業、行政、大学、そして私たちにも突きつけられているのではないだろうか。